戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

PDF版第9号　2026年2月号

1月10日発行



１月4日、ベネズエラ攻撃抗議、アメリカ大使館抗議行動

【巻頭言】2026年の課題 ベネズエラ攻撃の意図を踏まえ、軍拡予算・高市訪米・国家情報局創設&スパイ防止法・安保三文書改定反対へ！

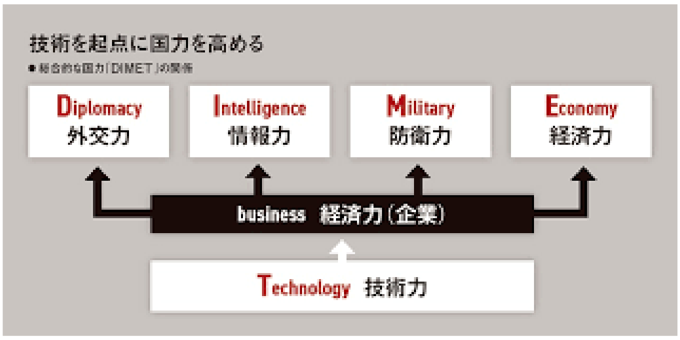
■2026年は、アメリカによるベネズエラ攻撃ーマドゥロ大統領拉致で幕が開いた。麻薬問題を「テロ」と位置づける牽強付会はトランプ流だ。だが、「テロ」という治安問題を戦争で解決する「対テロ戦争」戦争を、「権威主義国家」による「人権侵害・人道的危機」という真偽不明な情報戦を振りまいて、“人道的介入”“保護する責任”を盾に正当化し、石油資源をねらうというやり口は、イラク戦争などで嫌ほど目にしてきたものだ。

■12月には、シリアで、ナイジェリアで、米軍は対ISと称する武力攻撃を行った。「対テロ戦争」は続いている。

■中東では、イスラエルを尖兵に、ヒズボラ、フーシ派を叩き、ハマスに武装解除を迫っている。ガザ住民の強制移住先にすることを念頭に、イスラエルはソマリランドを承認した。イエメン内戦を巡るサウジアラビアトUAEの対立などアラブ諸国の動向も不確実性を増している。イスラエル・ハマス「停戦第二段階」が迫る中、何が起きるか予断を許さない。言えることは、トランプ政権は「力による平和」、即ち武力行使を辞さないということだ。イスラエル、そしてアメリカによるBRICsの一角でもあるイランへの再攻撃の可能性も高まっている。

■朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）も、「テロ支援国家」。ベネズエラ攻撃は、斬首作戦を想起させる。対北朝鮮恫喝にもなっていることを忘れてはならない。トランプ政権のやり口は、「力」を背景に一方的に要求を飲ませるようとするものだ。「対話」と称していても、妥協点を見出す「対話」ではない。飲めない要求を突きつけられた側はより頑なになるだけだ。「ベネズエラにならないためにも核軍拡」へと北朝鮮を追いやることになろう。

■「飲めない要求」と言えば、ウクライナに対するロシアへの領土割譲要求。ウクライナが飲めないから「和平」は進まない。それを前提に、プーチンはウクライナ東部だけでなく南部も含めた４州占領の既成実化を進めている。トランプの関心はウクライナの資源のみ。「停戦」したとしても、その安全保障は英独仏に押しつける気だ。領土をエサにロシアを中国と離間させたいのが本音。12月に公表したトランプ版国家安全保障戦略が基づいている勢力均衡論に基づくパワーポリテックというわけだ。



■ベネズエラ攻撃は、同国家安全保障戦略の言う「西半球」支配の序の口である。「次はコロンビアだ、グリーンランドだ、パナマ運河だ」という腹だ。それが目指すのは、重要資源のサプライチェーンの確保。重要物資、重要技術も同様だ。

■その背景には、本誌第５号で紹介したが、「力による平和」の「パワー」概念がある。その根底には、技術力に裏付けられた経済力が据えられている。軍事力の優位性もそれ次第だというのが基本認識だ。

■それに基づいてサプライチェーンから排除しようしている対象は中国だ。米中関税戦争は一時停戦となっているが、2025年版米国家安全保障戦略でも機微技術に関しては流出させないとしている。角度を変えれば、ラテンアメリカも中東もウクライナも、対中グレートゲームの戦場であり、ベネズエラ攻撃は、その一環としての「西半球」支配の確立の第一歩というわけだ。

■10月のトランプとの会談で“日米新時代”を謳いあげた高市首相は、「台湾有事＝存立危機事態」発言で、“日中新冷戦”時代を招いた。高市は、自ら招来した日中の緊張激化をも糧にして、「西半球」に集中するアメリカに代わって東アジアでの軍事的プレゼンスを補完するために増税大軍拡を行い、「パワー」の根底に位置づけられている技術力・経済力の分野でも「危機管理投資」を進めて“対中日米経済安保”の強化を図ろうとしている。2026年度予算は、それを体現したものだ。

■予算成立後の通常国会の焦点になるのは、国家情報局創設・スパイ防止法制定だ。それらも、“東アジアにおける米軍補完”と“対中日米安保強化”の一環だ。情報戦・諜報戦における日米の連携強化、軍事情報の防諜に限らない重要物資・重要技術に関する情報漏えい防止というわけだ。

■この通常国会前半と後半の境目、即ち増税軍拡2026年度予算の成立前後に、高市は訪米しようとしている。それは、国家情報局創設・スパイ防止法制定の次のステップへの跳躍台になろう。高市は、訪米で防衛費GDP3.5%化を約束しかねない。そして、今年中の安保三文書改定に向かうという寸法だ。

■トランプ政権による不測の武力行使に備えつつ、2026年の国内諸課題に取り組む態勢を創り出そう！

（文責:池田）

【活動日誌】 ※編集責任者の池田は、11 月の父に続き、母が 12 月に死去したため、以下のいくつかの取り組みに参加できなかったが、練馬アクションが深く関わっている取り組みについては掲載する。

12月8日 戦争に協力しない！させない！練馬アクション学習会 2025 年度補正予算案を斬る

〔報告〕補正予算は財政破綻を呼ぶ軍拡・軍需産業育成予算だ！

◇2025 年度補正予算は１８兆 3034 億円。内、国債整理基金特別会計への繰り入れなどを除く 17 兆 7028 億円が「経済対策関係経費」。だがこの**「経済対策関係経費」という名称が嘘八百**。「生活の安全保障・物価高への対応」に８兆 9041 億円が計上されているが、**「危機管理投資・成長投資による強い経済の実現」（1 兆 6560 億円）も、「防衛力と外交力の強化」（6 兆 4330 億円）も「経済対策関係経費」**として括られている。

◇補正予算は、震災対処予測できなかった事態に対処するために緊急に必要とされる経費を計上するのが本筋だ。「強い経済の実現」や「防衛力強化」とかの経費は、それに該当しない筋違いと言わざるを得ない。**2025 年度補正予算は、補正予算の本筋を外れた「軍拡予算・危機管理投資予算」**だ。

◇「生活の安全保障・物価高への対応」の中身も酷い。「足元の物価高への対応」は、ガソリン税の引き下げなど新規性は乏しく、「子育て応援手当」などバラマキ感が否めない。それどころか**「地方の伸び代の活用と暮らしの安定」には「治安・テロ対策の強化」や「外国人問題への対応強化」が盛り込まれており、看板を偽る治安弾圧強化＆差別・排外主義予算になっている。**

◇「危機管理投資・成長投資による強い経済の実現」には、**「経済安全保障の強化」として、AI・半導体、造船、量子技術、衛星コンステレーション、サイバーセキュリティ対策の強化、重要鉱物の安定供給確保など、軍民共用技術に関連する予算が並んでいる。**補正予算概要では「防災・減災・国土強靭化の推進」の項に**「国土強靭化（道路関連インフラの保全等）」が記されおり、軍民共用も射程に入れたインフラも含まれているかもしれない。**

◇防衛費に関しては、「①自衛隊及び活動基盤や災害対処能力の強化等、②自衛隊等の安全保障環境への変化への対応に緊要性の高い経費を計上」と「緊要性」を語っている。だが、①の「人的基盤の強化」の項には隊舎の個室化や立替などが並んでいる。「活動基盤の整備」の項には、**ドローン機材の導入、北大東島への移動式警戒管制レーダー等受入れ施設整備、沖縄の補給処支処新編に伴う施設整備**などが挙げられている。要するに**自衛官の待遇向上＆軍拡予算に外ならない**。「災害への対処能力の強化」（78 億円）には**「硫黄島における噴火被害の復旧」（31 億円）が盛り込まれているが、硫黄島の元島民は強制疎開されたまま帰還できず、現在、硫黄島には自衛隊しかいないので、自衛隊基地復旧予算と言えよう。**

②はもっと露骨な軍拡だ。**多用途ヘリ、護衛艦、たいげい型潜水艦などの購入に 1222 億円、03 式中距離誘導弾（改善型）、12 式地対艦誘導弾などの確保に 566 億円**が充てられる。

米軍再編経費（3451 億円）―馬毛島基地建設 2751 億円、辺野古新基地建設 534 億円も計上されている。

◇歳入も問題だ。歳入は税収、税外収入、公債費。**税外収入とは、国有財産売却収入、日銀の納付金、印紙収入などと特別会計や独立行政法人の余剰金。特別会計とは、特定の事業、特定の資金運用の会計で、介護保険特別会計や国民健康保険特別会計などである。これらをかき集めて防衛費を捻出**したのである。また**公債費は建設国債（35390 億円。当初 6.8 兆円―補正後 10.3 兆円）と特例国債（81570 億円。当初 21.9 兆円―補正後３０．０兆円）、併せて 1 兆 1690 億円（公債依存度 30.2%）**。特例国債とは、赤字国債の発行を一年に限り認めたものであり、2023 年度からこれで防衛費を賄うことが解禁された。東京新聞（2025 年 4 月 22 日）によると、三年で 2 兆円が発行されている。**要するに借金で軍拡**をやっているのだ。早晩、**財政破綻を免れない。増税必至**だ。既に**2026 年度予算から復興特別所得税 2.1%の枠組みを活用する方針**が示されている。

◇後日談になるが、与党のみならず一部の野党の賛成で、早々と補正予算は成立してしまった。安保・自衛隊認識を棚に上げても、財政面から苦言を呈する動きすら顕在化しなかったことは特筆すべき事態だ。既に国民民主は「年収の壁」178 万円引き上げを受けて 2026 年度予算案に賛成に回ると言っているが、財政規律の面から疑義を呈する議員との連携も視野に、**2026 年度本予算案審議に向け借金＆増税軍拡予算に反対する声を**強めよう！

・・

12 月 17 日 トランプも高市もイヤだ！池袋アクション ※池田不参加 次回は３月を予定

12 月 18 日 トランプ・高市“日米新時代”とどう向き合うか 12・18 討論会 主催:トランプ来日反対実

12月21日 集会・デモの自由を―埼玉「植樹祭」弾圧から考える 主催:もうやめよう！「植樹祭」埼玉実行委員会

12 月27日 第11回 ねりま市民大望年会

2016年１月4日 ベネズエラ攻撃を許すな！アメリカ大使館緊急抗議行動

＜資料＞ ベネズエラ攻撃を許すな！アメリカ大使館緊急抗議行動 呼びかけ 2026年12月18日

米トランプ政権は、「麻薬戦争」を「テロとの戦い」と位置づけ、「麻薬＝大量破壊兵器」だとして文字通りの“戦争”を辞さないとしています。喫緊のターゲットはベネズエラ。アメリカ南方軍は、「サザン・スピア作戦」と称して「麻薬密輸船」とみられる船舶への攻撃を実施している。カリブ海で9月2日にあった船への攻撃では、1回目が終わった後、炎上する船にしがみついていた生存者2人に対し、ヘグセス国防長官の指示に従う形で2回目の攻撃を実施した。国際法に反すると非難を浴びている。米軍は12月15日にも、東太平洋で麻薬密輸船とみられる船舶3隻を攻撃し、8人を殺害(12月16日段階の死者は少なくとも95名 by CNN)。トランプ米大統領は、12月16日、制裁対象となっている石油タンカーの南米ベネズエラへの出入港の全面封鎖を命じると発表。ベネズエラのマドゥロ政権を外国テロ組織に指定したとも表明した。米系石油メジャーの利権を損なう石油産業国有化を行ったチャベス政権を引き継いだ現在のマドゥロ政権は、アメリカの不倶戴天の敵。アメリカはベネズエラを経済制裁し、ベネズエラは石油減産に追い込まれ経済混乱、そして反政府勢力台頭、それへの強権的弾圧･･･。反米色の強い“社会主義政権”のお定まりのコースをベネズエラは描いてきた。トランプ米大統領の真の狙いも石油利権にあるとの見方が強い。人権という普遍的価値をかなぐり捨てたトランプ政権がベネズエラに対して行っているのは、露骨な石油利権奪還の試みでしかない。ベネズエラ政府が石油製品を積んだ船舶を海軍が護衛するよう命じ、ベネズエラの石油輸出を封鎖しようとする米軍と衝突する危険が高まっている。米軍がベネズエラ海軍のみならずマドゥロ政権潰しのために地上攻撃すら行うおそれもある。湾岸戦争と同じく「石油のための戦争」を許してはならない。以上から、米軍による攻撃があった場合、緊急のアメリカ大使館への緊急抗議行動を呼びかける次第である。是非、ご参加いただきたい！

＜戦争･治安･改憲NO！総行動実行委員会＋α＞

連絡先：破防法・組対法に反対する共同行動　03－3591－1301（救援連絡センター気付）
資本主義を超える新しい時代を拓く反戦実行委員会　090―4679－5592（東風）

＜参考書籍案内＞ ベネズエラについて知るために

住田育法･牛島万編著『混迷するベネズエラ 21世紀ラテンアメリカの政治社会状況』(明石書店、2021年)

危惧していたアメリカのベネズエラ攻撃が現実のものになってしまった。取り急ぎベネズエラについて知るために呼んで欲しい本を一冊紹介したい。住田育法・牛島万編著『混迷するベネズエラ　21世紀ラテンアメリカの政治社会状況』（明石書店、2021年）である。本書は、2019年に行われた京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の第19回ラテンアメリカ研究講座の報告者が講座での報告を踏まえて執筆したものだ。「はしがき」に「反米と親米、保護主義と開放主義、開発優先と経済格差など、対立する理念をそのまま受け入れ、多様な視座からの考察と論議を尊重した」とあるが、チャベス－マドゥロ政権についての評価も好意的なものもあれば否定的なものもある。それだけに、読者が自分なりに考えるための良著になっていると言えよう。「21世紀型社会主義」に対するオバマ政権による経済制裁、第一次トランプ政権による軍事的圧力といった流れを踏まえつつ、大統領権力強化と参加型民主主義によって成り立つポピュリズムをどう考えるのか。是非、ご一読されたい。

【集会案内】

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション学習会

2026年　私たちの課題

トランプ国家安全保障戦略と自民・維新合意文書を踏まえて

日時:2026 年1月12日(月）19:00　会場:サポート練馬 連絡先:090－5208－5803(池田)

■ 



「成人式」アピール

1 月 12日(月・休日)

①　練馬駅北口ペデストリアンデッキ集合 11:00　アピール11:20～12:30

②　同上集合13:20　アピール13:30～14:30

■大軍拡と基地強化に NO!アクション2025

増税軍拡予算に今こそ NO!を　2026 年度防衛予算分析会

日時　1 月 17 日(土)18:15開場　18:30 開始　会場　文京シビックの5階・C 会議室　資料代:500円

☆防衛省への申し入れ 1 月 20(火)18:45防衛省前集合　19:00申し入れ書手交　19:15終了予定

■「ヘイトスピーチ許さない・練馬」新年の集い



練馬区のヘイトスピーチ対応や

多文化共生政策等について考える区議会議員との懇談会

日時:1 月 28 日(水)19:00　会場:ココネリ3階・研修室3

■衆議院の憲法審査会が開催される場合は木曜日　なので…1月から 5 月、毎月、最終木曜日にやります！

開くな！憲法審査会　明文改憲も実質改憲も許すな！国会行動

軍事費 9 兆円―増税大軍拡予算反対！

育てるな！軍需産業　やめろ！武器輸出　安保3文書改定阻止！　持つな！原子力潜水艦

許すな！インテリジェンス・スパイ防止関連法

1月29日(木)11:00～13:00　衆院第二議員会館前　呼びかけ:戦争・治安・改憲 NO!総行動＋α

■ロシアのウクライナ侵攻 2022 年2月から4年　続く戦争の中で…

ロシアは今どうなっているのかー経済を中心にー

日時:2月5日(木）18:15開場　18:30開始 会場:練馬区役所20階・交流会場

講師:日臺健雄さん(和光大学経済経営学部教授）※資料代　500円

主催:戦争に協力しない！させない！練馬アクション　連絡先:090－5208－5803(池田)

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション学習会 **2026 年度予算案を斬る**

日時:2月9日(月）19:00　会場:サポート練馬 連絡先:090－5208－5803(池田)

【オピニオン】 国旗損壊罪を廃案に! 伏見忠(都教委包囲・首都圏ネット)



「えっ、国旗損壊罪?　悪い冗談でしょ?」と思ったら、なんと現実でした。先の臨時国会で参政党が国旗損壊罪の法案を提出し、自民と維新の連立合意書に、来年の国会で成立を目指すと明記されています。法案の内容は、日本国に対して侮辱を加える目的で国旗を損壊した者に拘禁刑や罰金に科すというものです。この法律が成立すると、個人の意思とは関係なく、日本国は敬意と尊敬をされなければならない対象となってしまいます。

この手の話は偏狭なナショナリストの「国旗に敬意を払うのは日本人として当然だ。」という声によって、理性の声が打ち消されてしまい、そして反対する者は「非国民」というレッテルが貼られ、者は声を出すことさえためらわれてしまいます。私は、「日の丸・君が代」強制反対のビラまきで、「日本から出ていけ」と言われたことがあります。ナショナリズムは時に理性を失わせ、対話すら困難になります。私たちは、感情的にならずに冷静に批判をしていくことが大切だと思います。

さて、国旗損壊罪は明確な「愛国心強制法」です。思想良心の自由を否定し、表現の自由を否定する憲法違反の法律です。表現の中身や内容を国家が裁く行為は、一種の検閲です。他者の人権を侵す行為でなければ、表現の自由を制限したり、思想や人の心を裁くことはできません。主権者が政治的な表現や象徴的な行為として国家を侮辱しようが尊敬しようが、それは各々の自由な判断にゆだねられ、国家が決めることではありません。これは主権者としての基本的な権利です。

次に、外国の国旗を損壊は刑罪の対象なのに、自国の国旗損壊に刑罰がないのはおかしいという声があります。しかし、立法の目的がそもそも違っています。外国国旗損壊罪は、刑法第九92条の「外交に関する罪」とされ、外国との外交関係が悪化することを防ぐための法律です。日本国の国威を守ることが目的ではありません。高市首相はかつてHPで「日本国旗損壊罪が無いのは法務省が『敗戦国』と説明した」と記述しましたが、この法律は1907年に制定され敗戦とは全く関係がありません。国旗損壊罪の成立に固執する高市首相の認識はこの程度のものでしかありません。

「他国にも国旗損壊罪はある」を根拠にする意見もあります。確かに、ＥＵの民主主義諸国には、国旗損壊法を持つ国があります。しかし、ＥＵ人権条約の10条によって表現の自由は保証されていて、国家の安全や公共の安全などを害さない限り、表現の自由は認められています。反戦や政府批判など政治的な抗議が目的の場合は無罪となっていて、一方ヘイト目的で国旗を損壊した場合は有罪となっています。ヘイトは表現の自由にはあたらず、他者の人権を侵害する行為になるからです。国旗に対する尊敬の念を守るために、民主義の基本原則の「表現の自由」を壊してはならないということです。

アメリカでは連邦最高裁は、国旗を焼却したり破損したりする行為に関し、「表現の自由として保護される」との判決が出されています。判決理由の中には、以下のような一文があります。「政府が象徴としての国旗を保護すべく努力する正当な利益を有するとしても、それは政治的抗議として国旗を焼却した者に刑罰を科すことが許されるということを意味するものではない。国旗冒涜を処罰して国旗を神聖化することは、国旗という表象が表している自由を希薄化することになる。」と。つまり、「国旗が象徴する国家の尊厳という価値」よりも、「国家を批判する個人の象徴的行為としての国旗焼却の自由の価値」が優越すると判断しているのです。ある最高裁判事は「痛恨の極みではあるが基本的なこととして、国旗は、それを侮蔑し手にとる者をも保護しているのである」と述べています。

また参政党は、日の丸に×を付けた行為に支援者が傷つけられたことを立法事実と言ってます。しかし、日の丸や君が代は、皇国思想や軍国主義の象徴であったことは、否定し難い歴史的事実です。国旗国歌法によって確定された現在でも、すべての人にとって価値中立的なものとは認められていません。最近では日の丸を掲げ行進するヘイトデモもあり、日の丸は排外主義の象徴としても機能しています。日の丸を見て悲しみ苦しんでいる人々の人権こそ守られるべきだと私は思っています。

教育現場の卒・入学式における「日の丸・君が代」の強制もそうですが、愛国心は強制できるものではありません。国家が刑罰で価値観を押し付け心を縛る国家は。尊敬ではなく侮辱されても仕方がないと私は思います。安倍氏も高市首相の言っている「世界の真ん中で咲き誇る日本」は、「世界中に恥をさらす日本」でしかないのではないのでしょうか。国旗損壊罪を廃案にしていきましょう。

【自衛隊･防衛省動向(2025年11月21日～12月20日)】

11月21日　小泉防衛相、ネットメディア「ReHacQ（リハック）」に出演し、自衛隊の階級名変更（例：１尉→大尉）に意欲を示す。憲法に自衛隊明記「必要」も。

11月22日　小泉防相、宮古島、石垣島訪問

11月25日　防衛省は、高橋咲恵（たかはし・さきえ）2等空佐を協力政策・企画班（CPP）政策幕僚として、NATO本部・軍事幕僚部・協調的安全保障局に派遣すると公表。女性・平和・安全保障（WPS）分野における協力の推進が掲げられている、2023年7月に合意・発表された日・NATO国別適合パートナーシップ計画（ITPP）に基づく実務的協力の一環。高橋2等空佐は、NATO本部の協力政策・企画班でNATOの各種計画の立案及び実行に関する業務に従事する予定。NATO本部への防衛省職員の派遣は、6人目。

・株式会社ビーマップ、元海上自衛隊海将補の中村徹氏に2025年11月25日付で顧問を委嘱。「「陸」「海」「空」の防衛のエキスパートが出揃い、当社の宇宙・防衛事業が本格始動」（同社ホームページ）。

・陸上自衛隊・北富士演習場で、沖縄アメリカ軍の実弾射撃訓練が始まる。

・西武バス、航空自衛隊と協力し、入間基地で自衛官約40名を対象としたバス運転体験会を11月8日に実施したと発表。迷彩服姿の自衛官がハンドルを握る。退職後の再就職でバス運転士を選択肢の一つとして検討してもらい、キャリア形成に役立ててもらうことが目的。

・小泉防衛相、記者会見で中国の批判に反論。与那国への部隊配備「防御目的」。

11月26日　海上自衛隊、17隻が参加した向灘での機雷戦・掃海特別訓練を終了（11月16日から26日まで）

11月27日～30日　内倉浩昭統合幕僚長、カタール軍参謀総長ヤシム・ビン・ムハンマド・アル＝マンナイ中将の招待を受け、カタールを公式訪問。自衛隊統合国外演習（JXO）の視察及びヨルダン軍統合参謀本部議長ユーセフ・アハメッド・アル＝フネイティ少将との会談のため、ヨルダンを訪問。統合幕僚長のカタール公式訪問は初、ヨルダンへの訪問は2年ぶり。

11月28日　2025年度補正予算案閣議決定。【活動日誌】の〔報告〕参照のこと。

11月29日　フィリピン海軍、海上自衛隊、防衛協力の強化を目的とした共同訓練を南シナ海で実施。護衛艦「はるさめ」などが参加。

12月2日　小泉防相、府中基地視察。

12月2日～5日　日本主催の「PSI（拡散安全保障イニシアティブ）海上阻止訓練『Pacific Shield 25』」及び「オペレーション専門家会合（OEG）」開催される。机上訓練（2日）、実動訓練（3日）、港湾訓練（3日）などを行う。場所は、外務省、房総沖。参加したのは、日本側は外務省、警察庁、財務省・税関、海上保安庁、防衛省・自衛隊、訓練参加国は、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、シンガポール、米国（以上、アジア太平洋ローテーション訓練参加国）の他、オブザーバー参加の20か国（オペレーション専門家グループ（OEG）参加国（12か国）　アルゼンチン、カナダ、チリ、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ポーランド、ポルトガル、スペイン、トルコ、英国／PSIに参加しているアジア太平洋諸国（6か国）　ブルネイ、パプアニューギニア、スリランカ、タイ、トンガ、マレーシア、ベトナム／PSIに参加していないアジア太平洋諸国（2か国）　ラオス、ナウル）と1関係機関（国連軍縮部）。

12月4日　宮崎県新富町の航空自衛隊新田原基地で最新鋭のステルス戦闘機F－35Bの訓練が始まってから1カ月。「夜間の垂直着陸訓練も行われ、基地の近くでは、家の中でも1分以上の騒音が続くことが日常となっています」とUMKテレビ宮崎が報道。

12月5日　第51次派遣海賊対処行動水上部隊「はるさめ」が中東地域での任務を終え、母港である佐世保港に入港(帰国)し、帰国行事及び統合作戦司令部作戦部長による表彰状の伝達が行われた（宮崎防衛副大臣が参加）。

12月6日～12日　中国海軍の空母「遼寧」が戦闘機などの発着訓練をおよそ260回実施したと防衛省が発表。海上自衛隊は12月9日以降、空母「遼寧」を含む複数の中国海軍艦艇が太平洋上の海域で航行していることを確認。12日には「遼寧」のほか、ミサイル駆逐艦や高速戦闘支援艦の合わせて5隻が沖縄本島と宮古島との間を北西に進み東シナ海へ向けて航行。防衛省・自衛隊は、警戒監視や情報収集を行ったほか、航空自衛隊の戦闘機を緊急発進させるなどの対応を取った。

12月7日　防衛省、「12月6日16時32分頃から16時35分頃までの間に、沖縄本島南東の公海上空で、中国海軍の空母「遼寧」から発艦したJ－15戦闘機が、当該機体に対する対領空侵犯措置を実施していた航空自衛隊のF－15戦闘機に対して、レーダー照射を断続的に行う事案が発生した」と公表。以降、日中間で非難応酬。

※18 日には、陸上自衛隊立川駐屯地に所属する東部方面航空隊の多用途ヘリコプターUH—1J が 17 日に訓練を終えて帰投中、静岡県三島市上空でレーザーを照射されたと発表。
・日豪防衛相会談。戦略的防衛調整枠組み（ＦＳＤＣ）を設置。
12 月７日～10 日　ベトナム人民海軍艦艇「チャン・フン・ダオ」が、広島県呉市にある海上自衛隊呉基地に寄港し、海上自衛隊との親善訓練を実施。「日越共同ビジョン」に基づく。「アジアと世界における平和と繁栄のための包括的・戦略的パートナーシップ」の一つの具体化でもある。
12 月７日～11 日　防衛省、スリランカ空軍招聘。能力構築支援実施。航空救難・航空医療搬送分野で協力深化。
12 月８日～11 日　海上自衛隊、米海軍と共同訓練を実施。訓練海域は関東南方。参加部隊は海上自衛隊:護衛艦「あきづき」、米海軍:空母「ジョージ・ワシントン」、駆逐艦「デューイ」。
12 月８日～12 日　米国・グアムで、初の日米豪印インド太平洋ロジスティクス・ネットワークに係る実働訓練。インド太平洋ロジスティクス・ネットワークは、昨年９月の日米豪印首脳会合でパイロット・プロジェクトの立上げを発表した協力。インド太平洋地域における自然災害への対応を念頭に、日米豪印が輸送協力を行い、迅速かつ効果的な支援を目指す。今回の実働訓練では、４か国の要員が航空自衛隊Ｃ－130H 輸送機に搭乗。
12 月９日　中国軍とロシア軍は、2024 年 11 月以来、今回で９回目となる爆撃機による共同飛行を実施。今回、中露の爆撃機は、沖縄本島と宮古島の間を通過して四国沖の太平洋にかけて長距離にわたり飛行（東京方面に向かうルートと言われる）。中露の爆撃機が共同で四国沖まで進出したのは今回が初めて。これに対して、自衛隊は、戦闘機をスクランブル発進させ、対領空侵犯措置を実施。
・防衛省 陸上幕僚監部、2026 年１月 19 日から２月 25 日にかけて実施される予定の 2025 年度方面隊災害対処訓練（「07 南海レスキュー」）の概要について公表。
12 月 10 日～11 日　航空自衛隊と米空軍が共同訓練を実施。訓練場所は日本海上の空域。参加部隊は、航空自衛隊：第３航空団 F-35 戦闘機×３機、第６航空団 F-15 戦闘機×３機、米軍：B-52×２機。
12 月 11 日　中国軍機から自衛隊機へのレーダー照射事案について、統合幕僚監部が 32 か国の在京武官に説明。
12 月 12 日　F-35A 戦闘機、５つめの飛行隊は千歳基地に 2026 年度から配備開始されることが明らかに。
・防衛省、連合宇宙作戦（CSpO）イニシアチブ将官級会議（12 月２日～４日）の概要を公表。連合宇宙作戦（CSpO）イニシアチブには、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、日本、ニュージーランド、ノルウェー、イギリス及び米国が参加。各国代表は、協力、調整及び情報共有を改善し、宇宙空間の脅威に対する共通理解をさらに深め、あらゆるレベルでの抗たん性を高めるために相互運用性を強化していくことで一致。



12 月 14 日　美ら島エアフェスタ 2025（航空自衛隊 那覇基地）で、ブルーインパルスが展示飛行。
12 月 15 日　陸自オスプレイ、佐賀県外の夜間飛行始まる　初日は福岡・長崎・熊本。
・中国新聞が「3 月に広島県呉市に発足した陸海空自衛隊の共同部隊「自衛隊海上輸送群」が、南西諸島の離島などの防衛を想定した訓練を本格化している。厳しい条件下でも人員や装備車両を安全に素早く運ぶ任務を負う。11 月上旬は濃霧や船内火災を想定し、広島湾で訓練航海。今後、港がない場所に車輛などを陸揚げする「ビーチング」の訓練も行う見込み」と報じる。
12 月 19 日　日・ニュージーランド物品役務相互提供協定(ACSA)及び日・ニュージーランド情報保護協定への署名
・防衛省、「スタンド・オフ防衛能力に関する事業の進捗状況について」公表。12 式地対艦誘導弾能力向上型（地発型）に係るデータを取得する目的で、米国（カリフォルニア州）にて、７回の発射試験（第１回発射　10 月８日／第２回発射　10 月 16 日／第３回発射　10 月 29 日／第４回発射　11 月 14 日／第５回発射　11 月 19 日／第６回発射　11 月 21 日／第７回発射　11 月 27 日）。
・中国、元統合幕僚長を務め、現在は台湾の行政院（内閣）政務顧問に就く岩崎茂に制裁を科すと発表。
12 月 20 日　陸上自衛隊と韓国陸軍が来年１月、幹部候補生向けの交流事業を計画していることが、日韓政府関係者への中日新聞の取材で分かった。日韓間の防衛交流・協力は、航空自衛隊基地で予定されていた韓国空軍機への給油支援を日本側が中止した 10 月以降停滞していた。「双方の防衛当局は今回の事業を機に事態を収束させ、今後の部隊間訓練の再開などにつなげたい考え」だと報じられている。

<小特集 ロシア・ウクライナにまつわる etc>

【チェックポイント】 中央アジア・日本首脳会議、そして日伊、日韓首脳会談へ

■ウクライナ戦争は、旧ソ連の中央アジア諸国の「ロシア離れ」を引き起こした。それは、「イスラム系武装勢力」の「脅威」とも絡んで、イスラム系住民の多いロシア内部の諸地域にも影響を及ぼす。ロシアから中国の影響圏への移行、さらにはロシア自体の中国に対する「従属化」にすらつながる。例えば、キルギス議会は、ロシア語よりもキルギス語の使用を強化する法案を可決したこれは、ウクライナ侵攻により中央アジア全域でロシアの影響力が低下していることを受けての措置だという（AFP、2025 年 6 月 26 日）。

◇ロシアもつなぎ止めに必死だ。プーチンは 10 月 9 日に行われたロシア・中央アジア首脳会議に参加した。だが、「ロシアメディアが最近、中国からロシアへの主要物流ルートの一つである中央アジアの旧ソ連構成国・カザフスタンが軍事転用可能な製品などに関してロシアへの通関管理を厳格化した結果、両国国境でトラックの大渋滞が起きていると相次いで伝えた」と言う（産経新聞、10 月 17 日）。



◇ということは、欧米日にとっても、ウクライナ戦争の帰趨に関わるだけでなく、対中戦略上、中央アジア諸国は重要地域ということになる。日本企業の進出も活発になってきている。双日は、ウズベキスタンで新首都空港の開発に参画する。サウジアラビア企業と組んで 2025 年中に建設を始め、28 年の開港を目指す。ウズベクでは病院や発電所などインフラ開発などに 10 億ドル（約 1500 億円）を投じる（日経新聞、10 月 1 日）。

日本政府は、対中包囲網に中央アジアを巻き込む策動をしてきた。「中央アジア＋日本」対話の初めての首脳会合に開催は 2004 年。2024 年 8 月、当時の岸田首相は中央アジア訪問、日本・中央アジア首脳会合を行おうとしたが、退陣。先延ばしとなった。その首脳会合が、2025 年 12 月 19 日、20 日、東京で開催された。

高市首相は、その「成果」を誇り、記者会見で以下のように述べた（12 月 20 日）。

> 私から**「CA＋JAD(Central Asia plus JApan Dialogue)東京イニシアティブ」の立ち上げを宣言**しました。また、５か国首脳との共同宣言であります「東京宣言」を採択しました。グリーン・強靱（きょうじん）化、コネクティビティ、人づくりの３分野を中心に、互恵的なプロジェクトを推進してまいります。特に、今回、**カスピ海ルートを含むグローバル・サプライチェーンの円滑化支援**や、「日本・中央アジアＡＩ（人工知能）協力パートナーシップ」を通じた**AI分野での連携**を表明しました。また、中央アジアは、エネルギー・鉱物資源を有する地域でもあります。特に、**重要鉱物関連では、供給源の多角化を通じ、グローバルなサプライチェーンの強靭化に向けた連携を強化**してまいります。さらに、今後の経済関係への高い期待を踏まえまして、これから５年間で、**総額3兆円規模の民間プロジェクト実施の目標を設定**しました。

◇一方、中国は、2025 年 6 月 17 日に、中央アジア 5 カ国と中央アジア 5 カ国とカザフスタンの首都アスタナで首脳会議を開催。「永久善隣友好協力条約」を締結。中国も「資源・エネルギー分野のほかサプライチェーン（供給網）の連結で協力を確かめたとみられる」と報じられている。「対中抑止で連携する主要 7 カ国首脳会議（G7 サミット）に対抗する狙いだ」とも言われている（日経新聞、6 月 18 日）。11 月 13 日には、「中国−キルギス−ウズベキスタン」鉄道・道路複合一貫輸送「レール・アンド・ロード」国際定期貨物列車の運行が開始された。

◎中央アジアを巡る日中ロのグレートゲームが展開されていると言えよう。中央アジアの権力者には、それを手玉に取って利益を引き出す狙いもあろう。だが、グレートゲームに巻き込まれることは、地域紛争や内戦の火種にもなりかねない（タイ・カンボジア紛争など、その兆候が東南アジアでも見られるのではないか・・・）。

■シルクロードの西端に位置するのがイタリアだ。旧ファシスト政党の流れをくむメローニ政権は、ウクライナ支援継続・対ロ制裁強化と共に、「一帯一路」から離脱。EU・米国の「架け橋」を自任。「不法移民対策」では、アルバニアに収容施設建設。高市とは馬が合う。そのメローニ首相の来日が 1 月 16 日で調整されている。

■李在明・韓国大統領が来年 1 月に訪日し、高市首相と奈良県で会談する調整も行われている。シルクロードは朝鮮半島を経て奈良に至るというわけだ。高市首相は日中関係が悪化する中、会談を通じて隣国の韓国との連携強化を確認したい考えだと報じられている（毎日新聞、12 月 4 日）。だが、李大統領は、日中関係の悪化を巡り「仲裁できる部分があれば役割を果たす」などと述べている（12 月 3 日）。

☆2025 年８月に開催されたアフリカ開発会議も思い出して欲しい。2024 年７月には島サミット。**日中のグレートゲームは、まさに地球大**で展開されている。その延長に**「アメリカの空白を埋める」と勢い込んでいる高市政権は、イソップの「カエルのお父さん」のように破裂への道を歩んでいる**のではないか。 **（文責：池田）**

＜小特集　ロシア･ウクライナにまつわる etc＞

【読書案内】なぜプーチンは強いのか？

鳥飼将雅著



『ロシア政治プーチン権威主義体制の抑圧と懐柔』

中公新書､2025 年５月

ロシアがウクライナに侵攻してから４年近くになる。

侵攻以来のロシア軍の死傷者は約 114 万人とも言われる（イギリス国防省が 12 月４日に公表した最新分析による）。ロシアがウクライナ侵略で膨らむ戦費調達に向けて増税する動きが鮮明になっている。対ロシア制裁（ロシアへの高度技術品などの輸出禁止、国際的な決済ネットワークシステムである SWIFT からのロシアの銀行の排除、ロシア進出企業の撤退、石油・ガス等の輸入禁止）にも晒されている。膨大な戦費は、財政を圧迫している。日経新聞（2025 年 12 月 20 日）は、「2026 年１月から付加価値税（VAT）を 2%増税するほか中小企業の納税負担を引き上げ、財政悪化に対応する方針だ。米国が仲介するウクライナ和平交渉に不透明感が漂う中、戦争が一段と長期化すればインフレ再燃につながる懸念が強まっている」と報じている。

にもかかわらず、プーチン体制に揺らぎの兆候が見えない。それは何故か？　本書はそれを知る一助となる。

本書のよい点は、「ロシアの国民性」に解消する論議に陥ることを批判し、体制分析に徹し、しかも「懐柔」の側面に焦点を当てている点だ。「プーチン権威主義体制を内側から見る」（終章のタイトル）というわけだ。

主な内容は以下。

> 2020 年の憲法改正で、組閣に関する連邦議会の権限は強化されたものの、実質的には影響力が大きくなったとは評価できない一方で、大統領任期のリセットで 2030 年までプーチンが大統領として在職し続けることが可能になった。しかも、地方検察のトップの任免権を与え、安全保障や治安維持に関わる省庁の大臣の任免権を独占することが明記されるなど、大統領権限は強化された（第２章　大統領・連邦議会・首相)。「裏でよりわかりにくい選挙操作を追求して、体制の勝利確率を高めつつ、表では公正で自由な選挙を演出する」ことで、「体制支持者の多くは、公正で自由な選挙によって現在の体制が選択されていると信じている可能性が高い」状況を作り出している（第３章　政党と選挙)。集権化によって行政効率を高める一方で、中央の責任を回避できるように、地方政府の責任を拡大している（第４章　中央地方関係)。中間層の多くが権威主義的な統治を支持している。その理由は、「ロシアの中間層の多くが、国家に依存した職に就いているためである。公務員や国営企業の職員、国家予算から給与を得る医者や教師などだ。法の支配が弱いロシアでは、民間セクターよりも国家セクターの方が、労働契約の信頼性が高く福利厚生も手厚いため、人気が高い傾向にある。給料も相対的に悪くないので安定した生活を享受しやすく、体制に対して不満を抱きづらい。彼らの生活は体制に従属しているため、国家の安定を強く望み、現状維持を優先する政治観を持つ。職を失えば次の職が見つからないと考える人も多く、そのため政治的に目をつけられて左遷・解雇されないように、保守化しやすい・・・」からだと言う（第６章　政治と経済)。メディアを通じた支配の重要性も大きくなっている。ロシアに限らないが、「インターネットや SNS などの新たな技術を通して、誰もが絶えず真偽のはっきりしない多量の情報に晒されている・・・状況を利用して、権威主義体制の支配者は情報の内容や流れを操作し、自らの恣意的な行動を「国益」のためのものとして正当化している」（第 7 章　市民社会とメディア)。

なお冒頭には「混乱から強権的政治へ」（第１章）が収められており、「ペレストロイカ以降の歴史」を踏まえてプーチン体制を理解する手がかりを与えてくれる。

だが、権威主義体制に死角がないわけではない。2008 年にメドヴェージェフに譲ったように大統領職を他者に譲って実質的にその者を統制する余力はプーチンには残っていなかったことから大統領権限強化・任期リセットを行った結果、プーチン個人に依存しすぎる体制となってしまい、権威主義体制の長期的存続のアキレス腱になっていると言う。

ロシアの権威主義体制は日本の今後を映す鏡でもある。是非、ご一読を！　　　　（文責:池田）

【雑誌漁り読み】

Newton 2025.12 月号

第1特集　人間の社会やあり方を問う　AI 時代の哲学

監修 松浦和也　協力 小濱聖子／筒井一穂　執筆 福田伊佐央



池田編集長が「これで【雑誌漁り読み】のコーナー書いてよ！」と、『Newton』の 12 月号を藍苑に持ってきたので、表紙だけ見て「うん、いいよー」と気軽に引き受けたものの…あとで特集を読んでみたら、私の頭の中ではエレカシの『ガストロンジャー』が流れました。（『ガストロンジャー』は　**♫そんなのお前百年前から誰でも言ってるよ／それ縄文時代から現代まで変わってねえんだよお前／BC 時代から同じこと言ってんだみんなお前**　って曲です。）

えっと…この『AI 時代の哲学』という特集をどのように紹介して「よかったらご一読を」という書評の展開にすればいいのでしょう？池田編集長もおそらく中味を読んでないままの雑誌を置いて、また実家に帰っちゃったし…でも、一人で書評の展開に悩んでいたら、なんか楽しくなってきちゃった！ふと、**この特集を作ったのって実は「壊れた AI」だったりして？！**とか想像したり…『Newton』に問い合わせたら「そっちこそ壊れた AI だ！」とか返ってくるのかな？（だけど、この特集を読む限り、そんな返しをする「＜ユーモアのある＞壊れた AI」でもなさそうな感じだから、問い合わせはやめておいた方がいいかな…。）

今回のこのコーナーをどう展開すればいいのか、方向性が全くわからないまま、とりあえず書き始めると、特集は**＜AI に“正しい倫理観”をもたせることは可能か？＞＜あらゆる人に「公平」な AI をつくることは可能か？＞**といったテーマのページから始まっているのですが…**「正しい倫理観」も「公平さ」もそれ自体、「正解」なんて決まってないんだから、AI にもたせられるわけないじゃない？！**（「どのような倫理観を AI にもたせるべきか？」とか「AI にもたせるべき公平性とは？」という問いを立てるならわかるけど、**そもそも問いの立て方からしておかしいでしょう？！**）私は自分が考える「正しい倫理観」に則って誰に対しても「公平」に接しているつもりだけど、私のことを「正しい倫理観や公平さに欠けている」と思う人だって、いくらでもいるわけでしょう？小学校の通知表で、学科以外のそういう変な項目の評価が低かった時、理不尽に感じた記憶が蘇ってきました…。**「私は正しい倫理観や公平さをもっているのに、あなたには欠けています」と小学校の先生だけでなく AI にまでやかましく言われる世界…想像しただけで、勘弁して欲しいですね。**

以前、落ち込んだ気分の時には竹内まりやの『元気を出して』を口ずさむという池ちゃんに「なんかそういう曲ってある？」と訊かれたことがあって、「うーん、私は落ち込むことってない…かも？この曲があるから…」と一緒に聴いたのがフミヤの『BODY』。♫おまえらなんて　最低さ／肉体なんて　欲でできた銅像さ／心なんて　どこを探しても見つからない／愛なんて　滅びゆく幻さ　って曲で、池ちゃんが「えらく攻撃的な曲だな」と笑うから「そうだよー。落ち込む前に攻撃に転じれば、落ち込まないでしょ」と笑っていたのですが…最低なのは、よくわからない変な項目で低い評価をつけた小学校の先生の方だから、私は理不尽に感じることはあっても落ち込みはしないのです。（**AI が私の人格を否定するなら ♫ AI なんて　最低さ**）

ところで、「落ち込んだ気分になる」とか「理不尽に感じた」とか、そういうことがイコール「心がある」ということになるのでしょうか？　特集には**＜人間と同じように振る舞う AI に『心』があるといってよいのか？＞**というページがあって、このページは２つの意味で衝撃的でした。まずは、日常生活では人間はお互いに何となく心というものがあるかのように振る舞っているけれど、「心とは何か」について明確な答えはないのだから、他人に心があると言えるのかわからないし、AI（機械）も同様…それなら「心＝入力に対して出力をする機能的な役割」だと仮定して、その出力で「他人に心がある」と判断しているのだとしたら、同様に「AI（機械）にも心がある」と言えるのかという話に関して。その話に言及するのは良いけれど、**1950 年のチューリングテストを紹介して終わり…それで『AI 時代の哲学』はないでしょう？！**というのが１つの衝撃。これでは、まるで AI 技術が日進月歩の進展を続けているのに対して、心の哲学は機能主義で止まったままになっているかのよう…。も

う１つの衝撃は、このページが「私たち人間は，自分に『心』があることを知っています」と始まって、「『自分には心がある』という認識以外は，わからないことだらけなのです」と終わること…。えっ？**「心とは何か」がわからないから、「『理不尽に感じた』=『自分には心がある』と言えるのか」というところから疑うのが哲学者ではないの？！**と驚嘆しました。

＜哲学は未来の問題を先取りして考えている＞というページには、「哲学とは，人間が生きていくために必要な何かしらの意義がある問題に取り組む学問なのです」「松浦教授はどんなに難しい哲学の問いにも必ず答えがあると思って，さまざまな問題に取り組んでいるといいます」とあって、これまた驚きました。**何かの役に立つかどうかなんてわからなくても問いを立て続けること、そして答えを得たと思ったらその瞬間に答えを疑うこと、それが「哲学」でしょう？！**と私は思っているので。哲学の研究室が大学で生き残るためには、私みたいに一個人として開き直ることはできなくて、キレイごとを言わないといけないのが現状なのかもしれないけど…百歩譲ってそうだとしても、**1950 年の話でストップしているのに「私自身は，哲学と自然科学をあまり区別していません。哲学は科学研究の最先端だと思っています」とか言う人がいるから、哲学者なんてどうせ科学の話についてこれていないとナメられて、「哲学」の地位が貶められているんじゃないの？！**とツッコミどころ満載…。

＜安全な社会をつくるために監視はどこまで許されるか？＞とか**＜不正をはたらくことがある人間よりも AI に政治をまかせたほうがよいだろうか？＞**とか、**「そんなの哲学以前の話でしょう？」**というテーマに関しては、大学受験予備校の生徒たちに対して、「これくらいのこと知っておいてよ」って思う内容はありつつ…でも、やっぱり全体を通してみて、この特集を読んだ若い人に「哲学ってこんなものか」と誤解して欲しくはないし、いい歳こいた大人がこの特集を感心しながら読んでいて欲しくない…。ねえねえ、そう思いますよね？いつも【科学哲学への招待】のコーナーを読んでくださっている「アクション科学哲学会」のみなさん？

と、たった今、思いつきで「アクション科学哲学会」を発足させましたが…そうだ！**格調高い「アクション科学哲学会」のみなさんには「この特集、他にここもツッコミどころだよね！」という感想を寄せていただけることを期待し、みなさんと一緒に話が盛り上がることを楽しみにしています♡**（これで無事に「よかったらご一読を」どころか「是非ご一読を」という書評になったから、池田編集長が練馬に戻ってきたら掲載許可をもらおう！）

後日譚…「ねえ、この前置いていった『Newton』の特集…」「あー！あの特集、ツッコミどころがいっぱいあってすごかったでしょ？！俺が書くより、君に書いてもらった方が説得力があると思って頼んだんだよー！あの特集、本当メチャクチャだよね！」って…ちょっと、池田編集長、それ先に言っておいてよー！

佐藤えり

〔参考資料〕 高市政権が示したAI 基本計画案――「国力を左右する」AI を安全保障の基盤へ据える（抄録）
佐藤仁（学術研究社・著述家） YAHOO ニュース 2026・12・20

「安全保障に直結」――AI を国力の中核に置いた宣言

2025 年 12 月 19 日付の首相官邸発表によれば、第 3 回人工知能戦略本部で日本初の「AI（人工知能）基本計画案」が決定され、AI は「産業競争力や安全保障に直結し、我が国の国力を左右する」と明言された。
ここでの焦点は、AI を利便性の技術としてではなく、国力を左右する基盤として扱うと宣言した点にある。

「安全保障」の射程――国家と経済を同じ文脈で

発表文は「安全保障」の範囲を定義していない。ただし同じ流れで「危機管理投資」「当面 1 兆円超の投資」「投資促進税制」「研究開発税制の深堀り」が語られている以上、軍事・治安に限定した意味での安全保障では収まらない。／技術基盤、投資継続性、産業の自律性を含めて国力を支える領域――すなわち経済安全保障を含む枠組みで語られている、と読むのが自然である。

実装の柱――政府利用・安全性体制・国産基盤

第一に、行政への組込みである。・・・第二に、安全性とセキュリティ体制である。・・・第三に、国産の基盤モデルとデータである。

投資と国際枠組み――長期戦に耐える「危機管理投資」へ

【科学哲学への招待⑦】高市は「働いて、働いて、働いて･･･」と言うけれど･･･

バートランド・ラッセル著『怠惰への讃歌』

（堀秀彦・柿村峻訳、1958 年、角川文庫／2009 年、平凡社）



今回は、大学受験予備校の季節労働のため新たに原稿を書く余裕がないので、ラッセルのススメに従って＜怠惰＞にストック原稿を使って古典作品をご紹介することにしますね。（【雑誌漁り読み】のコーナーが『AI 時代の哲学』論評になったので、こちらは今回エッセイのご紹介にしても良いですよね？アクション科学哲学会のみなさん？）

バートランド・ラッセル（1872 年 5 月 18 日ー1970 年 2 月 2 日）はイギリスの哲学者、論理学者、数学者として多くの業績を残した一方で、社会批評家、政治運動家としても活動しました。

ラッセルはケンブリッジ大学に学び、『表示について』（1905 年）で「指示対象が存在しない語句について、何らかの存在を仮定することなく、有意味に解釈する手法」である記述理論を発表したり、ゴットロープ・フレーゲの業績に触発され、「数学を論理学の一部と見なし、数学を論理学へ還元することができる」とする論理主義の立場から、ラッセルのパラドックスとその解決を含む『プリンキピア・マティカ』（1910ー1913 年）をアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドと共に著すなど研究を重ねていました。（「ラッセルのパラドックス」は、「ヒルベルト・プログラム」と「ゲーデルの不完全性定理」にも繋がる話で…この話について、W 部さんと私のメールのやりとりをこんな顔((((；゜Д゜)))))))して見ていた池田編集長、また改めて解説しますね。）

そんなラッセルですが、第一次世界大戦に反対したことで、1916 年ケンブリッジ大学の教授職を追われ、1918 年には 6 か月投獄されます。（面会に来た友人に「なんでそんなところにいるの？」と尋ねられたラッセルは「君こそ、なんでそんなところにいるの？」と尋ね返したとか、してないとか…。）ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインがこの頃に執筆していた『論理哲学論考』（1922 年）の出版にラッセルが尽力し、序文を書いたところ、ヴィトゲンシュタインから「何もわかってない！」と怒られてしまいますが、ラッセルは「ヴィトゲンシュタインが何を言っているのかはわからないが、彼が言っていることが正しいということはわかる」とヴィトゲンシュタインを暖かく見守り続けた、器の大きな人物としても知られています。（私が書いた【科学哲学への招待】の原稿に序文を付けている池田編集長みたい？！）

第二次世界大戦においては、第一次世界大戦とは異なり、ナチズムへの徹底抗戦を主張し、戦後は核兵器廃絶と科学技術の平和利用を訴える「ラッセル＝アインシュタイン宣言」（1955 年 7 月 9 日）を発表し、ベトナム戦争に反対するためにジャン=ポール・サルトルらと国際戦争犯罪法廷（1967 年）を開催したラッセルですが、今回ご紹介する『怠惰への讃歌』の原書“In Praise of Idleness”（1935 年）はそれより前、1928ー1933 年頃に執筆したものに出版にあたって新たに執筆したものを加えたエッセイ集です。

第一章　怠惰への讃歌　（一九三二年筆）
第二章　「無用」の知識
第三章　建築と社会問題
第四章　現代版マイダス王　（一九三二年筆）
第五章　ファシズム由来
第六章　前門の虎、後門の狼
第七章　社会主義の問題
第八章　西欧文明
第九章　青年の冷笑　（一九二九年筆）
第十章　一本調子の現代　（一九三〇年筆）
第十一章　人間対昆虫　（一九三三年筆）
第十ニ章　教育と訓練
第十三章　克己心（ストイシズム）と健全な精神　（一九二八年筆）
第十四章　彗星について
第十五章　霊魂とは何であるか　（一九二八年筆）

この本の表題にもなっている『怠惰への讃歌』では、労働生産性が向上しても人々が同じように働き続ければ過剰な生産と失業が生まれるのだから「誰も一日四時間以上働くことを強いられない世の中」であるべきと主張

し、それによって生じる「ひまの効用」については、それぞれの人が自分の好奇心で研究をしたり、芸術作品を創作したりすることができるだけでなく、「幸福な生活をする機会を持っているので、今までよりもっと人に親切になり、人を苦しめることも少くなり、また他人を疑いの目でみる傾向も減るだろう。戦争したがる気持ちはなくなってしまうだろう。一つには上に述べた理由のため、一つには、戦争はすべての人々にとって長い過酷な労役をもたらすからである」とラッセルは述べています。

昨年の夏、猛暑の中での過酷な季節労働に疲れた私は「死ぬ前に、死んだように眠りたいなぁ」と思っていたのですが、季節労働が終わってすぐに「ひまの効用」でその願いは叶うことになりました。この冬も、季節労働さえ終われば、「ひまの効用」で藍苑のみんなとの＜怠惰で幸福な生活＞がまたすぐに戻ってくるはず…。

ラッセルの言う通り、藍苑での＜怠惰で幸福な生活＞では、料理の仕込みをしたり、アクションの原稿を書いたり、絵を描いたり、アート作品を作ったり、みんなが来たら一緒に飲みながら色々な話を聞いたり、いつも楽しく過ごしているのに…季節労働に限らず、ずっと忙しい生活を送ったら、「戦争したがる気持ち」になってくるのかな？

学部生のときに、ラッセルの『西洋哲学史』（1945 年）を原書で読む読書会を開いていたことをふと思い出しましたが、あの読書会に参加していたみんなは今はどうしているのかな？あの頃みたいに＜怠惰で幸福＞なのは私だけ…になっていないと良いのだけれど。誰も過労で倒れてなんかいませんように！

このコーナーの読者のみなさんも、＜怠惰で幸福＞な方々ばかりとは限らないかと思うので、ご多忙な方々もたまには＜怠惰＞に「ひまの効用」について考えてみるのはいかがでしょうか？

【追悼】　池田編集長のお母様、池田恵美子さんが 12 月 11 日に急逝されました。いつまでも「ウチのお母ちゃんって美人だよな！八千草薫に似てるだろ！」とご子息に自慢されていた池田民也さん。恵美子さんがご近所にお買い物に出かけただけなのに、姿が見えないと不安になってしまって、恵美子さんが帰ってくるまで、ずっとトイレの小窓から外を覗いて待っていた民也さん。施設に入居されてからも、少しでも恵美子さんと一緒にいたくて、ワガママを言ってみんなを困らせていた民也さん。恵美子さんのお誕生日 11 月 8 日にご逝去された民也さんが、大好きな恵美子さんを連れて行ってしまったのでしょうか？

でも、民也さんと恵美子さん…12 月 11 日、恵美子さんまで急逝されるとは思っていなかったご子息は、最近すっかりお気に入りの＜映画館のポップコーン＞を齧りながら、『ペリリュー　一楽園のゲルニカー』を観て、そのあと『八木や』さんで「お刺身も角煮も美味しいね」と飲みながら、「やっぱり 2 月号は『怠惰への讃歌』でいこう！」なんて話していましたよ。だから、ご子息にはまだまだ（あと百年くらいかな？）こちらで私の＜怠惰で幸福な生活＞にも付き合ってもらいつつ、アクションニュースを発刊し続けてもらいますね。

池田民也さんと、民也さんに愛され続けた池田恵美子さん、お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

佐藤えり

〔コラム〕 母の戦争・戦後　池田五律

11 月の父に続き、12 月 11 日に母も逝った。父が 1933 年生なのに対して母は 1937 年生と四歳下で、しかも母の父が駐在だったので田舎を転々としていたため、本人の戦争に関する記憶はほとんどない。名古屋から二見ヶ浦に学童疎開してきた子どもに「もう親は死んでるぞ」などといった心無いイジメがあったとかは言っていたが・・・(多分、本人も加担していたのではないか・・・)。

ちなみに 8・15 後に生まれた母の妹は和子で、8・15 直前に生まれた親戚には勝子さん。同じ神社が命名。変わり身が早い。母の父、即ち僕の祖父は、水銀鉱山近くの田舎の農道でグラマンの機銃掃射にあい、九死に一生を得たと言っていた。グラマンの飛行士がニタニタ笑っていたとも・・・(同様の話をする人は少なくない。「グラマン伝説」！)。母の遠縁には、日中戦争と太平洋戦争と二度徴兵された人もいた。妻が赤十字の看護婦であったため戦地に駆り出され、乳飲み子の乳を求めて家々を回っていた人もいたとか・・・。

母の戦後は、ヘップバーンカットの高校生。結局祖父に阻まれたものの薬剤師になって自立しようと志した姉と違い、親と対決するよりどうせ無理なのだから要領よく高校生時代は遊ぼうと、今風に言えば、チャラい女子高生。腰掛的就労―花嫁修業の後、20 歳で遠縁の民也と結婚。夫を立て、夫の母とも「円満」な関係を見せ、子ども（私）にはひたすら厳しい専業主婦。価値観は差別的で全く「民主化」されないまま逝った。これもまた「戦後的人生」の一つの典型に思える。

<小特集 ロシア・ウクライナにまつわる etc>

【マイファミリー戦争・戦後ヒストリー①】

シベリアに抑留された父の戦争と戦後

八木孝雄さん（練馬で和食「八木や」経営）

　池田の父が死んだのを受けて、前号に「〔コラム〕　父の戦争・戦後」を掲載したところ、意外なほど反響が大きかった。そこで思いついたのが、NHK の「マイ・ファミリー・ヒストリー」をモジったこの企画である。
　初回は、お父さんがシベリアに抑留されたという八木さん。無理無理と言われるかもしれないが、これも<小特集　ロシア・ウクライナにまつわる etc>の一編として読んで欲しい。
　読者の皆さん！　あなたにもインタビューをお願いすることになるかもしれません。その節は、よろしくお願いします！

インタビュアー　今日は、お疲れのところにもかかわらずインタビューに応じてくださり、ありがとうございます。時間も遅いですし、早速、お話をお伺いします。

Ｑ　お父さんはシベリアに抑留されていたそうですが、何年のお生まれですか？　徴兵される前はどういう暮らし（仕事など）をされていたのでしょうか？

A 1926 年、大正 15 年から昭和元年になる年の生まれで、1993年に亡くなりました。本人はいつも昭和の「初めの年の生まれ」と言っていました。

和歌山県の出身で、大阪のどこかへ丁稚奉公に出されたらしいですが、詳しいことはわかりません。その丁稚奉公の後、大阪の堺市で果物屋さんを始めていたようです。

Ｑ　徴兵されたのは何年で何歳の時でしょうか　どの部隊に入隊されたのでようか？　敗戦時には何処におられたのですか？

A 徴兵された年や入隊した部隊については話していませんでした。シベリアで 2 年間抑留されたという話をよく聞かされました。敗戦時にどこにいたのか、どこから大阪へ戻ってきたのかなども聞かされていません。

Ｑ　シベリアの何処に抑留されていたのでしょうか？　抑留生活について何か聞かれたことはありますか？　話されなかったとしたら、その訳を八木さんはどうお考えでしょうか



A ハルビンの話を聞いた記憶があるのですが、父とは別に戦争の話をよくする人がいて、僕の記憶の中でその人の話と混同してしまっているかもしれません。シベリアは本当に寒いところで、お風呂上がりのタオルが凍ってしまうような寒さについては繰り返し話していました。「共産国の人たちはいざとなれば人肉も食べるような人たちなんだから戦争したって絶対に勝てっこないよ」と話していたことをよく覚えています。（今の日本人も「戦争したって絶対に勝てっこないよ」という思いは持っていた方が良いのではないかと僕も思います。）それと、「あの抑留の体験を思えば、あとの人生は苦しくなく過ごせた」と言っていました。

戦争の場面については全く話しませんでしたが、本人が「思い出したくもない」と言っていました。戦争から戻ってきた人が受け取れるはずのお金も、「そんなものを受け取ったら戦争を思い出すから」という理由で受け取らなかったようです。

母も戦争については一切語りませんでした。「戦争の話を聞きたいんだけど」と言っても、口をつぐんで何も言わないか、「知らん」としか答えてくれませんでした。父と同じく思い出したくなかったのでしょう。

Ｑ　復員されたのは何時ですか？　八百屋さんを営まれるようになった経緯は？　ご結婚、お兄様・八木さんがお生まれになったのは何年ですか？

A 復員についてもいつかは、わかりません。

地主で遊び人のような方が声をかけてくれて、「遊んでいるなら、土地を貸してやるから商売でも始めてみたら」と声をかけてくれたのがきっかけで八百屋を始めたようです。隣が地主さんのやっている野市の市場で、そこで仕入れができるという立地条件で八百屋にしたそうですが、戦争で食べ物に困った経験があって、食べ

物を扱う仕事をしていれば食いっぱぐれることはないという思いも強かったようです。ひょっとしたら、僕が調理師になったのも、父からそんな話を聞かされていたことが影響しているのかもしれません。

しばらく叔母と八百屋をやっていて、その後お見合いをして結婚したそうですが、何年かはわかりません。光明池(大阪府堺市と和泉市にまたがる)でのお見合いの話をよく聞かされて、子供の頃にピクニックのような感じで時々一緒に連れて行ってもらった記憶があります。今思うと、二人の思い出の場所だったのでしょうね。兄は 1956 年生まれで、僕は 1958 年３月 24 日生まれです。

Ｑ　八木さんが子どもの頃のお店や周囲の光景はどんなでしたか？（近所の人の戦争体験話とかも含め）

A　現在では泉北ニュータウン(堺市)の付近ですが、昔はのどかな場所で、イノシシを捕ってくるような人も近所にいました。周りは機織りもの(メリヤス関係)の工場がたくさんある場所で、ギッタンバッタンという音がしていました。

小学生の頃から八百屋の手伝いをさせられていたので、日曜日にみんなが遊んでいるのが羨ましかったですが、今思えばそのおかげで体が丈夫になったのかもしれません。隣の地主の息子さんご夫婦には大変かわいがってもらいました。一番上のお兄ちゃん(のちに早稲田大学に進学)、次のお兄ちゃん(のちに NTT に就職)、その次のお姉ちゃんも一緒に、夏は夕涼みをしたり、スイカを食べたり、というように家族ぐるみでの付き合いがありました。地主の息子さんは怪談話が好きで、『猫の恩返し』という怪談をよく聞かされましたが、戦争の武勇伝についてもよく語っていました。でも内容はよく覚えていません。覚えているのはゴマの倉庫に逃げ込んで、ゴマを布団がわりにして寝ようとしたら、寒くて眠れなかったという話です。だから、いつか僕はゴマの枕を作ろうかなと思っています。頭が涼しいと快眠できるでしょう？

他には、京都から来た和田カメオさん(奥さんがツルコさん)という、恐らく父と同じように抑留されていたのではないかという人の話で、「食べ物を探していて、セリを見つけたけど毒のあるセリだった」という話が印象に残っています。

Ｑ　振り返って、お父さんについて思われることがあればお話しください。

A　強い人。体が小さく、体重は 40～45kg くらいしかないけど。神経が細やかで八百屋に向いていたと思います。喘息、リウマチ、心臓病を患っているのに、60 歳を過ぎても朝 4～5 時に起きて仕事をしていました。思いついたことは何でもやる人だから成功したのでしょう。「地域でナンバー2 の八百屋になった」と自慢していました。僕はナンバー1 だと思っていましたが、父は「岸和田にもう一軒ある八百屋さんがナンバー1」だと言っていて、謙虚さもある人でした。

僕に対しては自分と性格が似ているから八百屋に向いているけど、兄貴の方は向いていないとよく言っていました。「単車に乗って、後ろから車に捕まっていれば速い」と思って、実際にやってみたら崖から落ちてケガをしたという話を亡くなる少し前にしていました。父には言いませんでしたが、僕も子供の頃に自転車で同じようなことをして転んだので、やっぱり性格が似ているなと思いました。

インタビュアー　今日は本当にありがとうございました。また、近いうちに飲みに行きます。



【エッセイ】朝霞駐屯地/自衛隊観閲式に反対する住民運動の記憶　荒巻克司（志木市在住・社会福祉士）



行っちゃだめ！南スーダン～朝霞「自衛隊中央観閲式」抗議デモ　2016年10月23日

1970年代には毎年、朝霞駐屯地（31普通科連隊）で観閲式が行われていた。

1990年くらいから、3年に1回、朝霞駐屯地に観閲式がやってくることになり、ついに2025年には観閲式自体を実施しないことになった。形式とうわべだけを重んじる旧軍からの伝統は放棄したのだろうか？　南西諸島の警備に人員を必要とするために式典はできない主旨の報道はされている。自衛隊に実戦配備の影響がここにも出ている。時代と状況の変化を感じる。

毎年、10月くらいに観閲式は行われた。

反対の意思を示す主な団体（政党、労働組合、市民団体他）は、朝霞駅のロータリーに集結してから旧254街道を歩いて、和光駅前までデモ行進をしていた。わたしは当時（大学生）。新座団地に住んでいた。わたしの近所に、太田博子市議会議員/無所属革新の事務所があり、その近隣の支持者の家でプラカードづくりをしていた。表現物を自作していた。

早朝にプラカードや拡声機にギターなどをワゴン車で運び移動して、新座市栄町にある公園に集合した。およそ50名程度のデモ隊でした。それでも、私服警察官や制服警察官がはりついてきた。栄町から、式場入口の前を通行して朝霞高校の校舎の前を通って、右に曲がり朝霞駅の反対側のロータリー前で解散した。ほとんどが主婦、そして子供連れでしたから、機動隊員による暴力的な警備はなかった。

攻防戦となったのは、式典ゲート前の500メートルくらいの直線の道路。デモ申請がおりなかったために、プラカードを下ろしては上げて、また、下ろしては上げては繰り返した。「観閲式反対」や「戦争反対」などの思い思いのスローガンをマジックペンで書いたホワイトシャツ（ワイシャツ）を半数の人は着ていた。

警察は、この行為が気に入らないのだろう！　「シャツは脱ぎなさい！」と拡声機で威嚇してきた。「脱がせるものなら脱がしてみろ！」と抗議していたのを覚えている。警察官といえども、女性の衣類を無理やり脱がしたら婦女暴行罪になります。デモ隊の作戦勝ちでした。

栄町から、デモ行進の出発時に景気づけで友人とフォークギター2 台でライブ演奏をした。反戦歌を歌った記憶があるが、何を？歌ったのか？覚えていません。替え歌を歌いまして録音はありません。残念！　その曲は、かなりおもしろい印象を与えたのか、歌い終わってからどっと笑いはきた！　私服刑事が恥ずかしげに笑っていたのを、わたしは覚えています。不思議な光景でした。

「おんな子ども」の50名程度のデモ隊などは威嚇行進にもならないですが、非暴力闘争というのは、こうゆうものなのかと、わたしは受けとめていた。

もしも、数万人も抗議の声をあげられたのなら、朝霞駐屯地1周を人間の鎖で取り囲むこともできます。

われらのデモ隊は朝霞駅ロータリーに面したビルの2階にある焼肉屋で昼ごはんを食べていた。立川基地とかで反対運動をしている人や議員も参加していた。

公安委員会は、われわれの住民の運動は「旧べ平連系」と呼んで警備対象にしていた。市議会議員の呼びかけのデモ行進でした。

無所属革新系で、革新無所属議員会議は組織されていました。朝霞基地撤去の動きは、1990年代からずいぶんと変化して、基地跡地の問題に置き換えられてしまった。そのへんの経過はわたしの知らないところです。一度、頭の中を整理したいです。

2025年から南西諸島での開戦を想定して、中国、台湾（中国）、米国、日本国にフィリピン国も巻き込まれて、戦時体制の構築は水面下で勢いよく進んでいます。

どうやって流れを逆転させるのかは、そのための表現方法には、非暴力行動とか、非暴力闘争とか、非暴力で平和を訴える表現、創意工夫を積み重ねて、世界中へメッセージを伝える手法を編み出さなければなりません. このことをときどきは思い出してください。そして、これから！はじめましょう。

以上　2025年12月24日

<小特集 ロシア・ウクライナにまつわる etc>

【文化欄 反戦歌謡考⑥】ドナドナ対談

佐藤えり×池田五律

NHK みんなのうた 1966年02月~03月



うた：岸洋子
作詞訳詞：安井かずみ
作曲セクンダ
編曲小森昭宏
映像アニメ：小薗江圭子/みわとしこ

ある晴れた　昼下がり
市場へ続く道
荷馬車がゴトゴト
子牛を乗せていく

可愛い子牛
売られていくよ
悲しそうな瞳で
見ているよ

ドナ　ドナ　ドーナ　ドーナ
子牛を乗せて
ドナ　ドナ　ドーナ　ドーナ
荷馬車がゆれる

青い空　そよぐ風
つばめが飛びかう
荷馬車が市場へ
子牛を乗せて行く

もしも翼が　あったならば
楽しい牧場に　帰れるものを

ドナ　ドナ　ドーナ　ドーナ
子牛を乗せて
ドナ　ドナ　ドーナ　ドーナ

えり 池田編集長に「12 月&1 月号は【文化欄】の音楽コーナーが途切れちゃったけど、どうしたらいいかな？」と訊かれて、「2 月号をロシア特集にするなら、音楽コーナーは『ドナドナ』がいいよ！」と答えたことは覚えているのですが、なぜ私は唐突に『ドナドナ』と言い出したのでしょうね？・・・酔っ払っていて、よく覚えていない上に、素面の私は『ドナドナ』について全く詳しくなく、一人で記事を書けそうにないので、対談形式にしてもらいました。

みなさんもどこかで聴いたことはあるのではないかと思う『ドナドナ』ですが、詞の内容がホロコーストのイメージと重ねられるため、反ユダヤ主義を批判した歌という印象をお持ちの方も多いのではないかと思います。ですが、元々は 1938 年に“Dana Dana”としてイディッシュ語で発表された「ベラルーシ生まれのユダヤ系アメリカ人アーロン・ゼイトリン作詞／ウクライナ生まれのユダヤ系アメリカ人ショロム・セクンダ作曲」の歌なんですよね。ご存知でしたか？（ちなみに、酔っ払っている時の私は知っていたみたいですが、素面の私は知らなかったので、調べ直しました。）

池田 『ドナドナ』って言えば NHK の「みんなのうた」っしょ。洋楽（古！）でいえば、ジョーン・バエズ。洋楽の翻訳版を子どもの頃、「みんなのうた」で覚えたよな。ビートルズの「オブラディオブラダ」も・・・。フォーリーブスが歌ってた。

ジョーン・バエズって言えばベトナム戦争に対する反戦フォークの代表的シンガー。子ども心に反戦っぽいって思ってたけどウクライナに源流があるとは・・・。

えり そんなこと言われても・・・そんな昔の話、知らないよー。

池田 ボブ・デュランはジョーン・バエズの後に登場。そしてベトナム戦争の激化と共にフォークロック、そしてザ・バンドをバックにロックへと転じていく。まぁ音楽シーン全体がフォークからロックへ。日本だと岡林信康が反戦フォークからはっぴーえんどをバックにロック調に転じていくのは、デュランの真似だから少し後。

でも、子牛って売られた後、どうなるの？

えり 牛本来の寿命は２０年くらいあると言われているのですが・・・仔牛で売られるオスは本当に仔牛肉（ヴィール）として「食べられる」だけですね。ヴィールにも種類がありますが、早いと母牛から引き離されてすぐに、生後２～３週間で食べられて、そこで難を逃れた仔牛も、60㎝ 程度の檻に入れられて、できるだけ運動できず筋肉がつかない環境下で、柔らかい肉になるように飼育され、生後５カ月～長くても１年以内には食べられて終わりです。

池田 アメリカへの主要な生体牛供給国といえばメキシコ（今は牛の感染症のため、アメリカは輸入を一時停止・再開・一時停止を繰り返しているけど・・・)。何となくメキシコのイメージがあったんだけど、ウクライナとはね・・・。



池田　ウクライナ、牛と来れば、シャガールだよね。
えり　知ったかぶりはダメですよー。シャガールは現ベラルーシの出身。
池田　エッ、そうなの！？　それはそうとウクライナも酪農盛んだよね。
えり　仔牛肉についての検索をしていたら、ウクライナ風ボルシチの料理レシピも出てきました。（美味しそう・・・）
池田　でもチェルノブイリ原発事故もあったし、ロシアの侵攻後はどうなってるんだろう。
えり　２月５日に呼ぶ＜池田チルドレン＞の日臺さんが詳しいんじゃないの？
池田　日臺君は、僕の直接の（予備校の）教え子じゃないよ。まぁ塾生の頃からよく話してたけどね。それに財政学が専門だし・・・。と言っても、ウクライナ経済の今についてよく知ってると思うから聞いてみよう。
えり　それを言ったら、私も厳密には＜池田チルドレン＞ではないけど・・・。
池田　シャガールに戻るけど、シャガールはユダヤ系だよね。
えり　そうですよ。
池田　ウクライナはポグロムが猖獗を極めた所だし、ロシア革命期にも独ソ戦期にもユダヤ系住民は悲惨な目にあった。そうしたことからイスラエルに移住した人たちも多い。その点でもウクライナと中東はつながっている。
えり　なんか『ドナドナ』の話から段々ズレていってるし、また知ったかぶりの知識を披露してしまう前に、このあたりで切り上げて飲み始めませんか？
池田　へぇ。

・・

【編集後記】

今回、初めて＜小特集＞を組んでみた。だが、父に次ぐ母の死でバタバタしていて、＜小特集＞としてのコンセプトがちゃんと成り立っているとは言い難い出来になってしまった。**「マイファミリー戦争・戦後ヒストリー」**を今回から企画したが、不定期連載モノを今後、いかに続けていくかも行き当たりばったりの状態。次々に問題にしなければならないことが出てきて、**「オピニオン」**コーナーも開設。これもどう継続するか、算段が立っているわけではない。全体としても、まとまりのつかない出来に今回もなってしまった。

その上、年始早々、アメリカによるベネズエラ攻撃。ベネズエラ攻撃があった際の緊急アメリカ大使館抗議行動の呼びかけを今回掲載して、次号でラテンアメリカの研究者にインタビューをして・・・などと考えていたのだが、構想が吹っ飛んでしまった！　次号どうする？

とはいえ、徐々にではあるが寄稿者も増やすことができてきた。観閲式がなくなったことを受けて何か書く人いないかなと思っていたら、丁度いい**「エッセイ　朝霞駐屯地/自衛隊観閲式に反対する住民運動の記憶」**が寄せられた。

とあれ、ドロナワ。次号は無理でも次々号あたりで、明確な＜小特集＞を立て、全体としてもまとまりのあるものしたい。**「昭和 100 年」翼賛の動き**を問題にする＜小特集＞や連載の工夫も試みたいと思っている。**スパイ防止法**についても同様の企画ができないかと思っている。

執筆だけでなく、編集会議へのご参加含め、ご協力、よろしくお願いします！

（文責：池田）

・・